Ⅳ　高校生で登校拒否を起こした生徒の事例とその治療的指導

1．はじめに

昭和53年４月より12月までの間，主訴が登校拒否で来談した高校生は16名である。

これを小泉英二氏の「登校拒否児のタイプ」により，分類してみると，次のようになる。

○心理的理由 ― 優等性の息切れ型……２名
　　― 甘やかされ型……５名

○精神障害……３名

○怠学傾向 ― 無気力傾向……５名
　　― 非行傾向……１名

○そ の 他……０名

また，この16名中，男子は14名で圧倒的に多い。また，この中で普通科に通学している者は10名にのぼっている。

そこで，本事例では，甘やかされ型に，無気力傾向が加味された，普通科２年男子生徒Ｓ男を取りあげることとした。

2．問題の概要

(1) 中学校時代までは，特に問題行動を起こしたことはなく，周囲から一応認められていた。

(2) 高校に入り，１年生時に，継続で30日間欠席，理由は風邪である。

(3) ２年生になり，始業式より5/15まで10日間欠席，理由は頭痛といっているが，怠休的傾向とみて，登校をうながしたが失敗する。

(4) 土曜日は登校し，月曜日になると欠席しがちで，登校時刻になると気分がすぐれなくなることが学校側でわかり，怠休でなく，登校拒否の徴候が疑われると，判断を是正している。

(5) 5/18　本人，父，担任教師が相談のため来所。

3．本人および環境の状況

(1) 本人の状況

① 学習状況および学習成績は，学習に対する意欲を欠き，授業時などは消極的・受動的で，家庭学習などもあまりしていない。従って，学習成績も振わず，学級では下位群である。
（１年生時の学級順位44/48）

② 行動および性格については，諸検査の結果抑うつ性大で，気分が変わり易く，さ細なことにも神経質傾向を示し，消極的で，耐性がなく情緒に未成熟の感が強い。

(2) 環境の状況

① 家庭環境

○ 家族は，父（44），母（40），妹（６），本人の４人家族で，両親共かせぎである。

○ 両親のＳ男に対する養育態度は一致しておらず，特に，父はＳ男のいうことはなんでも認めることによって，子どもは親を信頼していると思っている。また，母は，年齢の離れた妹の方を心配し，Ｓ男をそれとなく避けている。

○ Ｓ男は，家庭の中では「素直でいい子」として育ってきている。

② 友人関係

Ｓ男は学年，学級にこれといった親友がなく，中学校時代の同級生（某私立高校生）１名のみである。

③ 学校生活の状況

学校は大学進学希望者が多く，学習に気をぬいていると，とかくおいていかれやすい。１年より２年に進級のとき，組がえがあり，以前からの消極的な性格が，学級になじめず，孤立化を深めている。

以上のような資料（一部は初期面接において得たもの）から，次のように本人を理解し，診断および指導方針を樹立した。

4．診　断

(1) 精神的に幼稚であり，自我意識が年齢相当に健全な発達をとげておらず，非社交性が強い。

(2) 両親の養育態度の不一致から，家庭においては，価値の基準が，規範とし明確に示されていない。

(3) 学校側が最初怠休者扱いにし，登校刺激を加えたことが，神経症的傾向を助長してきている。

5．指導方針

(1) 毎週，自主来談の形をとり，抵抗なく来所で